

11 月例会報告

【日時・会場】2001年11月28日(水) 19:15～21:30 筑波大学附属高校会議室→～1:30 カリンカ

【参加者(会員)】小金丸浩志(京華高校)☆★ 中塚義実(筑波大学附属高校)☆★ 三堀潔貴(都立北野高校サッカー部顧問)☆★ 宮崎雄司((有)オフィスアステカ代表/サッカーマニア編集長) 村山勉((財)日本サッカー協会)

【参加者(未会員)】亀田耕司(成蹊学園)☆★ 酒井美央(ジョイ(株)) 田代憲介((財)三菱養和会/日本クラブユースサッカー連盟) 徳田親信(都立武蔵高校)★ 中村浩彦(朝日新聞科学部) 永井直樹(順天堂大学4年) 松井一乃(大東文化大国際関係学科3年) 三井耕(都立南葛飾高校)☆★ 吉田智彦(笹川スポーツ財団)

注1) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

注2) 今回は、「東京都ユースリーグ準備委員会(仮称)」と「東京都高体連サッカー科学研究会」を兼ねて開催しました。名前の右肩の「☆」は準備委員を、「★」は高体連サッカー科学研究会員であることを示します。

ユースリーグの可能性と課題ー2010年を視野に入れてー
東京都ユースリーグ準備委員会(仮称)

<目次>

1. 前回までの復習
2. 各地区「プレリーグ」の進行状況
3. 今後の進め方ー2010年を視野に入れて

<ディスカッション>

<感想・意見(中塚義実)>

1. 前回までの復習

ユース年代のより良いサッカー環境を目指して「DUOリーグ」が文京区・豊島区で始まったのが1996年度のこと。毎年春と秋の年2回行っているリーグ戦は、ユース年代のサッカーの生活化に貢献している。理念に賛同するクラブも年々増えつづけ、この動きを東京都全域から関東・全国へと広げ、レベルに応じたリーグがある「衛星型サッカー環境」を構築すべく、底辺から活動をしている。

一方、トップレベルにおいてもリーグシステム導入は具体的な課題として取り上げられており、2002年度からは関東ユースリーグが始まることになっている。関西ではすでに始まっている。

2000年6月の東京都サッカー協会(TFA)理事会にて、「東京都ユースサッカーリーグをつくる」方向

性は確認された。しかし、T F A 2種委員会では検討の時間もなく、進展しないまま 2000 年度を終えようとしていた。「どこかが動き出さなければならない」ということで、東京都高体連の 8 つの地区からそれぞれ準備委員を出してもらい、ユースリーグの可能性と課題について検討することになった。それが「ユースリーグ準備委員会(仮称)」であり、2001 年 5 月より毎月「東京都高体連サッカー科学研究会」の勉強会を兼ねて検討を進め、2001 年 9～12 月に各地区で「プレリーグ」を試み、可能性と課題を探っているところである。

「準備委員会(仮称)」は現在、高体連の委員のみで構成されている。しかしながら、ユースリーグはクラブユース連盟とともに作り上げていく必要があるし、業者やメディアと協力しながら進めていく必要もあるだろう。そこで 10、11 月と、2 回にわたってサロン 2002 の月例会で取り上げることにした。

2. 各地区「プレリーグ」の進行状況

前回に引き続き、各地区「プレリーグ」の進行状況について、担当者から報告があった。

<第 1 地区> (江戸川・江東・葛飾・墨田・荒川) 担当：三井耕

第 1 節のトラブル (片方のチームの人数が少ないままはじめてしまった) をきっかけに、互いの話し合いで「メンバーの貸し出し OK」ということになった。

高体連の新人戦が雨で延び、第 5 節 (最終節) を予定していた 12 月 2 日に高体連の地区選抜選考会が入った。1 地区では以前から冬休みに「寅次郎カップ」を行っており、それと重なるため残り試合が消化しにくくなってきた。「寅次郎カップとユースリーグをダブらせて本年度中にできないか (つまり、寅次郎カップとユースリーグを兼ねてゲームを行うという案)」という話も出ている。

高体連に加盟している学校だけで、「練習試合」という形でやっているのですが、事故に対しては「日本体育・学校健康センター」の災害給付金が支給されるが、「大会として保険に入れるのではないか」との意見も出ている。

補足：DUO リーグにおいても初年度に、「新人戦でどうせ当たるのでそれをリーグの試合と兼ねることはできないか」という話が出たことがあった。チェアマンとして、それは認めなかった。

<第 2 地区> (足立・文京・豊島・中央) 担当：小金丸浩志

DUO リーグでは、本年度の活動方針の一つでもある「IT 革命」が勃発し、ホームページができた<<http://www.d2.dion.ne.jp/~makotomo/index.html>>。これから改善を加えてより良いものにしていく予定である。また、J C Y (日本クラスユースサッカー連盟) 主催のシンポジウムや、S S F (笹川スポー

ツ財団) 主催のスポーツセミナーなどでDUOリーグを紹介する機会があり、好意的に受けとめられている。

多くのゲームをこなさなくてはならないDUOリーグだが、11月の高体連新人戦期間中も並行して進められた。あらかじめ組まれていた試合以外でも、グラウンド空き情報を「DUOリーグ通信」で流すと、グラウンドのないクラブから連絡がきて埋まっていく。加盟クラブの当事者意識がベースである。

12月23日を最終日としており、この日に「DUOリーグ選抜」の活動や「FCDUO」と称してのOB・教員のお楽しみゲーム、そして2部リーグプレーオフが行われる。3チームによるプレーオフは、20分ハーフの総当り戦となった。20分ハーフなら2試合行っても40分ハーフのゲームと負担度は同じである。変則的ではあるがこの方法を採用し、23日には全日程を迫えて「DUOリーグ会議」で締めることとした。

そのため2部リーグは12月21日までにゲームを終え、その時点の順位でプレーオフ進出チームを決定する。「前日のゲームまで認めてはどうか」という意見もあったが、FIFAの大会ルールに基づき48時間はゲーム間隔をあげ、連戦を認めないという方針を貫いており、リーグは3ヶ月という期間で行われるということを重視した。足立区周辺で行われるAリーグについては、例年どおり1～3月に開催予定とのこと。詳細は不明。

<第3地区> (板橋・台東・北・新宿・渋谷) 担当: 三堀潔貴

高体連の委員校5校、8チームで構成しているが、12月22, 23, 25, 26日までゲームを行って年内にすべてを消化する予定。

強豪高との間に意識のずれがある。プログラムができたあとで遠征に行ってしまうなど、リーグ日程よりもチーム事情を優先されることがあり、問題が残った。リーグに強豪校が入った時の意識のずれが課題である。

3地区ではグラウンドのないところがリーグに入ってきた。ここに入ればグラウンドがなくてもゲームができるという意識だろうか。逆に、グラウンドが確保できる場所は、リーグに入らなくても自分のところで何でもできるので入ってこない。グラウンドの確保は大きな課題。北野高校では近隣住民からの苦情もあって、一時会場となることが危ぶまれていた。それについては管理職と相談して再開している。

<第4地区> (千代田・港・品川・大田・島嶼部)

担当者欠席。

<第5地区> (練馬・中野・杉並・西東京市)

担当者欠席。

<第6地区> (目黒・世田谷・町田市・狛江市・稲城市)

担当者欠席であったが、資料「Sリーグ通信」あり。Sリーグは間もなく全日程終了するが、年内には終わらない模様。Sリーグでは舞試合最優秀選手を選出しており、そのリストもあった。

1月から、Sリーグ内の中学を併設している学校で「Sリーグジュニア」を開催することとなった。Mリーグは9チーム総当り、1校1チームでやっている。進行状況は不明。

<第7地区> (三鷹市・調布市・府中市・国立市・立川市・日野市・多摩市・八王子市)

担当者欠席。

<第8地区> (武蔵野市・小金井市・小平市・国分寺市・清瀬市・東久留米市・東村山市・東大和市・武蔵村山市・あきる野市・青梅市・西多摩郡・昭島市・福生市) 担当：亀田耕司

7チーム×4ブロックのグループリーグが順調に進んでいる。各ブロックの順位リーグを1～2月に実施する話が出ている。

Aブロックでは、とにかく全試合やってみようということで、1日2試合の日を設けたりして消化した。雨で流れたゲームもあるが、8地区の場合は各校にグラウンドがあるので割り当てには苦勞しなかった。

Cブロックは1チーム辞退が出て6チームで行い、全日程終えた。1日1試合、会場が4つあるので半日でリーグ戦をやり、午後は自由に使ってくださいという形で進めた。久留米高校や東海大菅生高校の、普段ゲームに出られない子の出場機会が増え、モチベーションが上がったのは確か。底辺の拡大にはつながるということを感じた。「久留米高校を強くしたのは私たちです！」。

参加費徴収に関わる問題(あるブロックでは徴収し、別のブロックでは徴収しない)とともに、メンバーのエントリー問題が残った。同一チームなのに毎回メンバーが違ったり、大事な試合でトップチームのメンバーが降りてくることがあった。この時期、3年生が試合に出られる場がない。

3. 今後の進め方ー2010年を視野に入れて

<ユースリーグ準備の進め方>

以下の流れを考えている。現在各地で行われているのは「1」の段階である。果たしてこのようなスケジ

ユールは可能だろうか。

1) 2001 年度後期(9～12 月)…試験的に、できるところで「プレリーグ」をはじめ

イメージ	練習試合の組織化
目的	リーグ運営の体験(シミュレーション) 各地域ごとの課題の抽出 周囲の理解と啓蒙(「お～やっとなるあ」「なかなか良さそうやなあ」と思わせる)
期間	2001 年9月(または8月末)～12 月 24 日 日程が合えば、各リーグ優勝チームによる「チャンピオンズカップ」を行う

2) 2002 年度前期(4～7 月)・後期(9～12 月)…区市町村リーグの発足

これをもって東京都ユースリーグの正式な立ち上げとする

基本的にはトレセン地域をベースに、区市町村(隣と組んでも良い)単位で底辺リーグを行う

3) 2003 年度前期(4～7 月)・後期(9～12 月)…トレセン地域リーグの発足

できれば、7 地域リーグ交流戦(欧州チャンピオンズリーグの東京都版)を実施して今後につなげる

4) 2004 年度前期(4～7 月)・後期(9～12 月)…東京都ユースリーグ 1 部発足

<ユース年代の改革に関する動向>

ユース年代の今後に関連するテーマについて、JFA 内では以下のプロジェクトで議論されている。

- 1) JFA 技術委員会・ユース強化育成部会 (部会長：小野剛氏)
- 2) JFA 第 2 種大会部会 (部会長：上野二一氏)
- 3) JFA クラブづくりプロジェクト (リーダー：久米一正氏)
- 4) JFA 登録プロジェクト (座長：森健児氏)

この他、JCY (日本クラブユース連盟) においても、「2010 年のサッカー環境私案 (中塚案)」が 2001.10.23.の理事会で提起され、「JCY ヴィジョン」を田代事務局長が中心になって作っているところである。これらの流れを視野に入れながら今後について議論したい。

<ディスカッション>

● エントリーの問題

- ・「大事なゲームになると強い奴が出てくる」ことになるとモチベーションが下がる。A チームと B チームのメンバーはきちんと分けるべきではないか。
- ・A チームの補欠(ぎりぎりでは出られない者)の出番がない。DUO リーグでは「同一クラブ内の移籍は 30

分まで可」として、Aのサブの子がBに出ることを認めている（「同じ節に複数チームから同時に出場するプレイヤーがいないように、メンバー構成は各クラブが責任を持って行う。但し、30分以内の出場は認められる」DUOリーグ規約より）。

- ・オフィシャルな形になってくると、登録や移籍の部分を整理していかないといけないだろう
- ・オフィシャルな大会としたいのか練習試合の延長なのか。この間の線引きがポイントになるだろう。リーグが組織され、昇格や降格という仕組みができればできるだけオフィシャルの方に近づき、移籍等の規定を厳しくせざるを得なくなる。監督同士の紳士協定でできればいいのだが、「この試合は負けられない」となると、選手の貸し借りはややこしくなる。

- ・昇格・降格といったときに、「ルーズさ」が「ズル」につながる可能性はある
- ・上昇志向ではなく底辺の拡大を目的として、普段真剣なゲームができない者にゲーム経験を積ませることを第一義に考えるべきではないか。きっちりやりたい部分とアバウトにやりたい（やらざるを得ない）部分が分化していくのかもしれない。
- ・「ここから上はきちんとやろう」という話ではないか。すべてに厳しさを追求するのモどうか。

●経費の問題

- ・オフィシャルにすればするほど財政的なところがネックになる。DUOリーグはユース審判員でいいだろうけど、東京都1部リーグが高校生同士の笛の吹きあいでいいのか。審判の派遣や芝生のピッチとなって、良い環境でゲームをしようとなるとお金がかかる。

●ニーズに応じたイベントをどうつくるか

- ・リーグは強くするためにあるのか楽しむためにあるのか
- ・一番のねらいは「サッカーを日常生活に位置付けること」と考える。同レベル同士で、ある一定期間ゲームができるようにしようというのがねらいの第一。サッカーが身近にあることを目指す。そのためにリーグをつくり、その合間にカップ戦があるような仕組みをまず作る必要がある

- ・フェスティバルや定期戦といった単発イベントもあっていいし、それだけに参加したいという者がいてもいい。トーナメントだけ、単発イベントだけでいい人たちにリーグ加入を勧める必要はないし、それは無理。リーグに入ることは運営の当事者になることである

- ・大会に出ることが選手のモチベーションになっている。ゲームだけでいいなら2軍戦でもいいし紅白戦でもいい。オフィシャルな大会に出て勝利を目指すことで楽しみたいという者もいるはず。勝利志向と楽しみ志向は別のベクトルではない。同レベルでリーグを組織することで勝ったり負けたりになる。そこに選手は喜びを見出す。

- ・トーナメントだけだと大会期間があいてしまう。チーム作りの観点からも、長い期間を使って向上できるリーグが必要。上手になることで喜びを感じるということもある。

- ・選手のモチベーションとチーム、クラブのモチベーションにずれがあるのでは。クラブとしてその試合

をどうとらえるのか。強化のためか楽しむ場としてなのか。

●リーグの構成員をどう捉えるか

・「トーナメントだけで十分」といったチームに対してリーグ参加を促す必要があるのか。リーグの構成員になることは、リーグ運営の当事者になるということでもある。それなりの態勢を持った「クラブ」が加盟できるのだと思う。最終的にはそういったクラブを各地域で育てていくことが必要。

・自分たちの意志でリーグへ参加するというのは、底辺が切り捨てられる懸念がある。運営の当事者にはなろうと思わないけどゲームやりたい者が切り捨てられるのではないか。

・草サッカーにおいては、勝ちたい者と遊ぶことができればいい者がいる。同じ高校のサッカー部でも上昇志向の者とそこまで思わない者がいる。どこにでもある普遍的な課題

・「クラブ」の概念を明確化する必要がある。一つのクラブの中に競技志向のチーム・プレーヤーがいていいし、楽しみ志向があってもいい。リーグに参加しないで単発的イベントを追っかけるチーム・プレーヤーがいてもいい。リーグ、カップ、フェスティバルといろいろあれば、いろんなニーズの受け皿になる。運営の当事者になろうとしない者はリーグに入るべきではない。けどフェスティバル等の単発的イベントでプレーはできる

・ニーズの違いは絶対にある。草サッカーでも高校運動部でもある。本来は、同じレベル、ニーズを持つ者が集まるのがチーム。クラブは多様な人の集合体。クラブの中の似た者同士が集まってチームを作り、自分たちのニーズに合った活動をすればいい。今はたまたま同じ学校で集まった者がつくるチームしかないなので、「100人のチーム」などというおかしなことになっている。

●東京都特有の課題

・東京は全国的に見て非常に特殊。まずはチーム数が多い。高体連だけで 320 チームある。しかしその割にピッチ数が少ない。例えば高知県だと高体連は 32 校しかないがいずれもピッチを持っている。1部 8 チーム、2部 8 チーム×3 ブロックつくれば全てうまく仕組みにはまってきて、1年間で、どこのチームもチャンピオンになれる構造ができる。しかし 320 チームもあった場合、底辺からスタートしたチームだと1年では決して1部のトップには立てない。ユース年代でそれでいいのかという問題がある。また、320校がすべてリーグに加盟したとして、1節 160 試合。1会場 4 試合として、40ピッチとらねばならない。8つの地区があるとするなら各地区5面を毎週コンスタントに確保できるか。多摩地区は余裕があっても、23区内で5面きちんと確保できるかどうかは難しい。地方へ行くと、日程もピッチも余裕があったりする。全国展開するとき、各地の事情がずいぶん違うので一緒に語ることはできない。その一方で、東京では交通の便がいいというメリットもある。

・例えば北海道だとクラブユースの大会をするのも大変。毎週リーグがあったとしても、移動が大変で、参加したくても出てこられないだろう

●どの範囲でリーグを組織するか

・2002年度から関東ユースリーグが始まる。クラブユースの場合、トップの4チームはこのリーグでゲームができるが、それ以外のチームには活動の場がない。そこで2部、3部、4部を関東エリアで作ろうとしているが、交通の便が良い東京・千葉・埼玉・神奈川のクラブに強豪が多く、茨城・群馬・栃木・山梨など、関東の周辺県のクラブが下位リーグに位置することが多くなるだろう。ドーナツ現象とも言える事態が起きており、遠隔地の移動が大きな問題である。

・本来は、レベルが上がるほど活動範囲が広くなり、底辺に近いほど狭いエリアでというのが基本。レベルが低くなると広域になるというのはおかしい。関東レベルに達していないから2部にいるわけで、そうしたチームは高校、クラブ関係なくリーグを作ればよいというのが自然な流れ。

・都全域で強いチームのリーグがあり、その下にはトレセン地域でリーグがあり、さらにその下に区市町村リーグがあるというイメージ。上に上がれば広いエリアで、下に下りれば地域に帰っていくというのが自然。クラブユースだけのリーグには無理がある。高校もクラブも同じところでリーグを組織する必要がある。

・今から40年ぐらい前は「南関東大会」として東京と山梨がいっしょになってやっていた。かつては東京も範囲が広がった。チーム数が増えてくると細分化してくるのは当然の流れ。

●学校の限界とクラブ育成の必要性

・今やろうとしているリーグ組織が都内で完成すると、320チームよりも多くなるかもしれない。320の中には11人いないところもあるだろうが、100人いるところが5チーム出してくれば1000チームに達するかもしれない。

・「責任者がつかなければならない」となったときに1000人もいるかどうか。高校生は自分たちだけではできない。責任を持って活動する意識を持った顧問のいるチームは1000もない。

・高体連的にいうと引率は学校の先生でなければならないが、スポーツ的にいうと、学校の先生よりも指導者の勉強をしたOBや地域のおやじの方がはるかにいい。これらを開拓することが必要。

・学校に頼っているから問題が出てくる。学校から離れていかないと無理。学校ではなく、違った形をつくらないとスポーツが進歩していかない。しかし、引率が学校の先生でなかったときに怪我をしたら誰が責任を取るのか。社会的に認知されるか。

・これまでは、高体連が把握する「単一の学校運動部」と、JCYが把握する「Jクラブ」「J以外の地域クラブ」があった。これからはこの中間的な存在として、「複数の学校の連合組織」を育てていく必要がある。例えば、白山駅を利用する京華高校と向丘高校の連合組織「白山クラブ」があつていい。高体連の大会に出るときは、「京華高校」と「向丘高校」といった単一校のチームとして参加する。けどリーグ

には、別の切り方、例えばレベル別・ニーズ別にチームをつくり、両者のトップチームとその下のチーム、あるいはレジャー志向のチームを作る。あるいはリーグに関わらないけど単発的なイベントやフットサルをやりたいという者もいるだろう。リーグを組織し、合間にカップ戦があり、単発的なイベントが散らばめられたイベントシステムによってレベルやニーズに応じた多様な活動が可能になる。こういうのをイメージしている。

●リーグ日程、シーズンをどう捉えるか

・カップ戦は、上位リーグに属しているチームは待ち伏せしていればいい。これによって日程の問題も解消するのは。

・年間を通したリーグ戦にするのか、ある程度期間を区切ったものにするのか。J F Aのユース育成部会では「どうすれば良い選手が育つか」が議論のスタートになっている。サッカーの生活化がスタートはなっていない。そこが少し違う。

・クラブユースの子は、夏で3年生が大会に出なくなってしまう。Jユース選手権に3年生はほとんど出てこない。特にJクラブは、上に上がれない3年生（次の進路選択の準備をしている）よりも1,2年に経験を積ませる。上に行く者はこの時期にはサテライトでプレーしており、ユースの競技会には出場しない。後期のリーグに3年生をどれくらい引っ張れるかが一つのポイント。

・Jユース選手権は、最初はJクラブだけで始まったが、今では地域クラブも入り、クラブユースの中で浸透している。J C Yは夏にイベントが集中している。そしてここで3年生が活動を終える。秋から新しいシーズンが始まるという感覚が定着しており、秋に各地で行われるJユースの予選が、1,2年生の育成の場となっている。12月の本大会を終えて1～3月に鍛え、4月から夏に向けての大会が始まる。こんな流れができています。

・オフィシャルリーグは単年度で完結させるのかどうか。一番上から一番下まで、1部～10部ぐらいまでできるかもしれない。リーグ予備戦を導入するなどして、今年はどこからはじめるかを毎年決めるのか、それとも前年度の結果を引きずるのか。3部のチームはチャンピオンになる可能性はない。そういうのを高校の大会でするのか。チーム数が多ければ多いほどこの問題は大きく、悩ましい問題。

・解決策はクラブで考える。例えば「白山クラブ」には上のリーグに属するチームと下のリーグに属するチームがある。サッカータレントは上のチームでプレーさせればいいし、そこは移籍で対応できる。育てるべきは個人とクラブ。チームは大会ごとのエントリーとして、登録や加盟とは別に考える仕組みで対応できないか。

・リーグ戦で一番になるのが一番価値があると考えられるか。今のところ高校生が勝ちたいと思っているのは選手権。リーグは基本的には育成の場で、勝負はカップ戦ではないか。それならば、単年度の完結かどうかはあまり重要な問題にならないのではないかと。

・リーグ戦が一番というように持っていきたい。真のチャンピオンはリーグチャンピオンだろう。

●ユース年代の改革全般について

・ユースの競技会に関しては高校選手権の問題を避けて通ることはできない。今のままの高校選手権を残しておいた方がいいとは思いますが、2種の大会で4万も5万も入る方が異常なのだという考え方もある。

・「2010年のサッカー環境(試案)」には年末に無理がある。各リーグのチャンピオンー例えば9地域リーグのチャンピオンを集めた競技会を、日本一のリーグチャンピオンを決める「チャンピオンズカップ」として開くとすると、それをどこに置くのかが難しい。年末には高校選手権、Jユース選手権、それに天皇杯とある。

・日本のスポーツが大きく変わるときである。JFAの改革を見据えた上で、JCYも同じベクトルで進めていきたい。「プレーヤーズファースト」という考え方には賛成。今、大きな改革をしなければならない。

<感想・意見(中塚義実)>

「DUOリーグの話聞かせてほしい」という依頼が多い。10月には青梅市の中学校の先生方に、11月には笹川財団のセミナーやJCYのシンポジウムで、そして今月は兵庫県サッカー協会(「出張サロン in 神戸」)。「何かを変えなくてはならない」と、心ある人がいろんな現場で悩んでいるところへ、明確な理念とビジョンを持ったDUOリーグが、目に見える形で成果を上げている。たいていの方は相当おもしろがってくれて「すばらしい。よくやった」と賞賛してくれるし、「大変ですね」とねぎらってもらえる。何となく「やり遂げた」ような気になってしまうひと時…

けど実際のところ、「まだ何もやり遂げていない」し、もっと言うと「まだ何も始まっていない」。サッカー好きの高校生は世の中に大勢いる。だからこの仕組みを横に広げていく必要がある。また、上を目指したい者もいればゲームができれば満足という者もいる。だから縦へも広げていく(希望すれば上に上がらない仕組みも含めて)必要がある。広げていって始めて「始まる」し、始まったら「続ける」のである。続けるための仕組みも含め、オフィシャル化をめぐる問題は避けて通れない。

月例会でも出てきたように、オフィシャル化をめぐるのは多くの課題が立ちふさがっている。しかし、底辺から徐々に積み上げていくアプローチには、大きな可能性があると感じる。プレーヤーチームクラブーアソシエーションという、スポーツの制度化の過程を底辺から見つめなおすことは、移籍を含めた登録の問題や、組織の基盤づくりについてのヒントを、机上でなく現場で提示してくれるだろう。

「オフィシャル化」はオフィシャルな制度や考え方を受け入れることだが、底辺からの組織化により、現場の問題をオフィシャルな制度の改革に反映させることもできるかもしれない。何ができて何ができないのか。サッカー協会とも協力しながら進めていきたい。今週末は、兵庫県の方々と意見交換し、「2010

年のサッカー環境」を語り合うことになっている。
こちらも楽しみである。